

海上

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別徴収承認雜誌第三五二号）
昭和三十五年七月二十五日印刷 昭和三十五年八月一日発行

第二十六卷

第八号

八月号



新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
尚編集の都合で大変遅れました事をおわび申
上げます。

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

浄土 八月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

聖者の非人情……………佐藤賢順…(2)

善も悪も世のならい……………吉野翠幹…(20)

末法万年のはじめなり……………石原宥政…(26)

新安保条約批准と新聞の責任…青砥信…(10)

高僧伝 久我誓円尼……………大橋俊雄…(18)

法然上人の感化……………村上博了…(14)

新編 百喻経(七)……………伊東挙位…(25)

信仰相談……………(30)

扉の御法話……………(29) 因襲再考……………(24)

童心仏心……………(9) 故郷……………(13)

創作 世尊と阿闍世―最終回― 鶴田湛泉(32)

浄土

八月号

不輕大士の、杖木瓦石をしの
びて、四衆の縁をむすび給しが
ごとく、いかなるはかり事をめ
ぐらしても、人をすすめて念仏
せしめたまへ、あへて人のため
には侍らぬぞ。

法然上人御法語



聖者の非人情



佐藤賢順

一

今日は、法然上人の手紙の中から一つ二つを選びまして興味のありそうな話題をお話しようと思います。

法然上人の手紙は、現在二十通ほど残っていますが、いづれも晩年に書かれたものと思われるのであります。人の手紙というものは、その人柄をよく表わすものであります。法然の手紙も、弟子からいろいろ信仰上の事について、たずねられたのに対して、親切にこまごまと答えている手紙が多いのであります。私事、私用の手紙というものは

ほとんど残っておりません。黒田の聖人に使わす御文であるとか、或いは大胡の太郎につかわす御文であるとかいう消息は、現在でも浄土教の概論とでもいうような大切なものでありまして、浄土教徒に取りましては、ほとんど經典と同じような重要さをもって扱われているものであります。

今日はそのうちから二つを選んでお話し申し上げます。聖者とか上人とかいわれる程の人で、宗教の世界に深く入った人たちは慈悲が深く、心が寛容で、どんな事をたのんでも何んでも聞いてくれる、力になってくれる、というふうに思われているのは普通であります。人間性の表も裏

もよく見抜いた人で、しかもその人間性の水準を突きぬけて、醜い我欲というものをはるかに越えて、悟りの境地に達した人でありますから、そういう人は何人に対しても寛容で、人情深いというのは当然であります。時とする、そういう聖者、上人の言動には、はなはだしく非人情な処があつて、それが苛酷であるとさえ思われるほど厳しいものがあるのであります。

法然は申すまでもなく日本に於ける浄土教の祖でありまして、親鸞の浄土教信仰も、このひじりの晩年の円熟した思想を受け継いで生れたものでありますが、その上人の手紙の中に、熊谷蓮生房直実くまがえんせいぼうに与えた手紙があるのであります。

法然の弟子に熊谷蓮生房直実という人がいたということ
は周知の事でありまして、これは普通、レンシヨウボウ、レンシヨウボウと読んでおりますが、伝統的な正しい読み方に従いますと、レンセイ房というのであります。この人は、歌舞伎の例の一の谷ふたば軍記のような芝居の主人公になるほどに色々、奇行に富んだ人でありまして、一の谷の合戦で平家の若い大将の敦盛に出あつて、実は殺したくはなかつたのでありましょうが、大勢味方の武将が見ているので、これをにがすわけに行かず討ち取ってしまう。その悔恨の情といひますか、自責の念といひますか、それも一

つの動機であつたであらうし、又、久下権頭直光くげごんのかみなおみつという者と領地争いをして頼朝の幕府に提訴して、その結果裁判となつたのでありますが、口べたの一介の武人でありましたので、この訴訟に負けて、領地の三分の一以上を召取られた、そういう忿懣が重なつた事もありまして、遂に出家を決意して、五十六才の時に京都に出かけて行つて法然の門に入つたのであります。

法然は当時六十才でありました。三年の間そこにとどまつて法然から念仏の教えを受けて、この専修一行の道に精進したのであります。しかし郷里の武蔵国の熊谷には年取つた母を一人残して出て来たので、それが気がかりで三年目に一度熊谷に帰つてまいりました。ところが、国元に帰つて見ても京都の恩師の懇ろな教導が忘れられず、老母のことは妻とせがれの直家にたのんで、また京都に登つてしまひます。今度は五年も滞在してまた国へ帰つてまいりました。やはり残してまいりました老母のことが気がかりであつたからでありましょう。帰つては見たものの、郷里に帰えれば帰えるで、またなつかしい京都の法然上人のことが思い出されて、どうしても行きたくてたまらない、矢も楯もたまらないという氣持になつてしまふのであります。蓮生房は出家道と在家道との間をあっちこちとさ迷つて、仏道と孝道との板挟みになつていたような日日を送

っていたのであります。

蓮生は上人に手紙を書きました。その手紙は現在残っておりませんので、どんな事が書かれていたか確かな事はわからないのでありますが、それへの法然の返書が残っているのも、それから察すると、蓮生の手紙の内容が漠然とながら窮えるのであります。おそらく蓮生が手紙に書いた事は、こういう事であつたらうと想像されます。それは蓮生のような体力の勝れた、何んでもむずかしい修行の出来そうな人間に取っては、専修一行といつて、ただ念仏を唱えろという事だけではものたらなくて、何かその外に、例えば、戒律をたもつとか、お経を誦誦するとか、誦文を唱えつづけるとか、或は理観と申しまして、むずかしい観法の修行をするとか、そういう事をしなくてもよいのだろうか、という疑問が出て来たのであります。その当時はもちろん、現在でもそうであります。専修一行だけでは満足しないで、色々他の修行を合せて行つてゆかなくてはなるまいという気持ちになる人もあるようであります。やはり蓮生もそういう気持ちを持ったのであります。そして、その事を法然上人の処に尋ねたのであらうと思われるのであります。

とくに、蓮生に取りましては、極楽往生の為に念仏をはげむ事の他に、母への孝養という事が、常に頭にこびりついていたのでありまして、この念仏修行と母親への孝養と

どちらが重いかという、またどちらが大事であるかという事に思いまどつたのであります。そしてまた上洛して、京都へ行つて恩師のもとへ参じたいのであるけれども、そうかといつて年老いた母を一人おいて妻や子にたのんで行つてしまふと云うわけには行かぬ。そういう事は人の道にはづれる事であらうと、なやへんだのであります。そういう手紙を蓮生が上人に送つたのであります。これに対して上人の返事が残っております。

「御文よろこびてうけ給わり候いぬ。誠にその後はおぼつかなく候いつるに、うれしくおおせられて候。よつて念仏の文かきてまいらせ候。御らん候べし。」

こういうこまやかな愛情の籠つた書き出しで、念仏の行と他の持戒、誦経、誦呪、つまり戒律をたもつ、お経を読む、呪文を唱える、などを比較しまして、念仏の他の行は仏の本願ではないからそれを修しても極楽往生は出来ない。しかし念仏を修して余祐のある人は他の行を修するのにもよい。こういって、さらに孝養に言及して、こう云つてゐるのであります。

「孝養の行も仏の本願にあらず、堪えんにしたがい
て、つとめさせおわしますべく候。」

本願の行と申しますのは、無量寿経に書いてあることで、阿弥陀仏が衆生救済の為に約束された本来の誓願とい

うことで、阿弥陀仏の御名を唱える者を阿弥陀仏はかならず救済して下さるという、本来の誓約をいうのであります。

そこで孝養は極楽往生のための本願の行ではないから、出来る程度にすればよい、というのであります。これは、何んという非人情でありましょうか。仏道と世道とを秤りにかけて、仏道の方がずうっと重く下ったので、母親への孝養はつっぱなされたというのであります。しかしこの非人情は決して、不人情とか薄情とかいうものではない。さんざんに人間性を反省し考究した挙句、そこを突き抜けて、超人情というべき立場に立って、そこから人間性をも一度見直したのであります。宗教は現実の人情に溺れたり流されたりせずに、そこから超え出るのでありますけれども、越え出っぱなしでは勿論ないのであります。現実をつっぱなして再び現実にかえって来るという処に宗教の実際の生活があるのであります。宗教が現実の生活にもっている実際の意味というものは、この現実にかえり来たるという処にあるのであります。

それはさておきまして上人はこの手紙で、孝養は本願の行ではないと突っぱなしたままではなくて、やはり人生において孝養が如何に大切であるかを説いて、次のように書いております。

「ただしこの中に孝養の行は仏の本願にて候わねど

も、老母本年八十九才におわしまし候なれば、相かまえて今年などをば、往生待ち入らせ候べし。ただ一人を頼みにおわしまし候えば、孝養に念仏を心静かにおつとめなされ、めでたく極楽浄土の往生をお待ちなさるべく候。」

こういう大変あたたかい文句なのであります。孝養の行は、仏の本願ではないから念仏とどちらが大事かといえは、勿論念仏の方が大事なのだけれども、母も本年八十九才でおわすのだから、「相かまえて今年などをば、往生待ち入らせ候べし。」こういうわけであります。

いよいよ往生も今年あたりであろうからお前一人を頼りにしていられしやることではあるし、親孝行と念仏を心静かに務めて極楽往生なさるように工夫してあげて、めでたく極楽往生がかなったら京都にやって来い、という法然の心のこもった手紙なのであります。

蓮生は一刻も早く京都に行つて法然にあいたいと心はやっているのでありますけれども、上人がこのように孝養の尊さを説いておさえていたというわけであります。

これを見ましても、宗教者の非人情が決して、ただの不人情とか薄情とかいう事でなくして、超人情とでもいうべきものであるということがわかるのであります。

これに比べられる様な手紙がもう一つありますので、お話をしてみようと思います。

それは正如房に与えた消息であります。法然に正如房という尼さんの弟子がありました。正如房は聖如房と書いてある本もありまして、どういう人であるかはっきりしなかったのですが、近年の研究によって、後白河法皇の第三女、式子内親王であることが明らかになりました。そうであるとする歌人で、当時の第一流の才女でありました。この正如房を取りまく人々が、この人のことを、「いかにめでたき貴き人」とか「世に貴きめでたき人」とかいつている所からみても、高貴の出の尼さんであることが察せられます。

正如房は深く法然に帰依して念仏の行者となっていました。病の床に臥して、いよいよ再起はむつかしく、命終も近いというときになって、侍者を遣わして、病の重いことを伝え、命終の前にもう一度おめにかかって、教えを受けたいから是非おいでを願いたい、と伝言してきたのです。これに対する法然の返書がこれであります。それは纏綿とした情緒を漂わせている消息でありまして、或る人がディヴァイン・ラブレターといっているほど深い情愛に満

ちたものですが、それにも拘らず、一面において、誠に厳しいもので、通常の人のとうてい窺うことのできない心境のものであります。そこに書かれていることは、全くの非人情であります。その手紙にはこう書かれています。

「正如房の御事こそ返えす返えすあさましく候へ。その後は心ならずうときようになりまいらせて、念仏の御信心もいかがかとゆかしく思いまいらせ候いつれども、さしたる事も候わず、また申すべき便りも候わぬようにて、思いながらなにとなくむなしくまかりすぎ候いつるに、ただ例ならぬ御事、大事になどばかり承り候わんだにも、いま一度、見まいらせたく、終りまでのお念仏の事も、おぼつかなくこそ思いまいらせ候べきに、まして御心にかけて、つねにお尋ね候らんこそまことにあわれにも、心ぐるしくも思いまいらせ候え。」

こういう思いやりの深い、真情のあふれた書き出しであります。その意味は——正如房のことはまたとにお気の毒です。その後は心ならずも御無沙汰をしております、念仏の御信仰も一層進んでいるかと案じていたのですが、大した用事もなく、お便りをする序もなかったのです、心にかけるながらも御無沙汰してしまったのです。所がいまのお便りで、御病氣も大変お悪いと承って、驚いております。もう一度おめにかかって御臨終のお念仏のことなども心にか

かるのでお話したいと思っておりますのに、そちらよりお心にかけて、お尋ね下さったことは、誠に恐縮であります———というのです。このあたりは一般の人の手紙と交わっていませんが、これに続いて、次のように書かれております。

「左右なく承り候まきに、参り候て、見まいらせたく候えども、思いきりて、しばし出ありき候わで、念仏申し候わばやと思いはじめたることの候を、様にこそよる事にて候え。これをば退しても、まいるべきにて候に、又思い候えば、詮じてはこの世の見参はともかくても候なん。屍を執ずるまどいにもなり候いぬべし。」

この意味はこうであります。———そう承りましたので、早速参上しておめにかかりたいと思うのですが、思いとどまって、しばらくは外出せずに、念仏を申したいと決心しているのです。であります。(これはいま別時念仏にはいつている、ということ、別時念仏というのは七日間とか三週間とか日をきめて、念仏に精進する行事であります。上人はときどきこうして別時念仏を修せられたのであります。)しかしそれも事と次第によることで、御病氣が重いと承れば、それをも中止して参上いたすべきであります。また思い返えしますと、結局、この世でおめにかかることはどうでもよいことでしょう。もしおめにかかれば、却って肉体に執

着して惑いにおちいるということにもなるでしょう。———というのであります。

これは実に厳しい言葉であります。われわれならば、親しい人が重態だという報らせを受ければ、どんな用事をしていても、何を置いても飛んでいつて見舞わずにはいられません。それが人情であります。法然もこの手紙の文章にありますように、何度か思い直し思い返えして、行こうか行くまいか、と思案したのではないかと思われます。しかし結局、常の人を超えた非人情で、行かないことに決心したのであります。

この手紙には、もっと厳しい言葉がこれに続きます———「たれとても、とまりはつべき身にも候わず、われも人もただ遅れ先立つ変りめにこそ候え。その絶えまを思ひ候も、又いつまでぞとさだめなき上に、たとい久しと申し候とも、ゆめまぼろしく程かは候べきなれば、ただかまえてかまえて、おなじ仏の国にまいりあいて、蓮の上にて、この世のいぶせさをもはるけ、ともに過去の因縁をも語り、互に未来の化導をもたすけん事こそ、返えす返えす詮にて候。」(下略)

この意味は委しく申上げるまでもないことですが———誰でも、いつまでも生きていられるわけではなく、ただ遅いか早いかの違いがあるだけで、死ぬときがいつと決まっ

いるわけでもなく、長生きするといったところで、どうせ夢のような人生のことなのだから、長生きしたところで大したことはない。ですから必ず同じ阿弥陀如来の極楽浄土に生れて、蓮の上で、この世の悲しい思い出を打払い、ともに仏の国に生れた因縁の深さを語りあい、これからどのように衆生を導いていくかを話し合うことが大切でありましょう。――

というのであります。ここに書かれていることは、あまりに厳しすぎて、われわれにはとうてい寄りつけないであります。いま見舞いに行けば、屍に執着することになるであろうとか、どうせお互は遅かれ早かれ死ぬのであるから、今、会わなくとも、極楽の蓮のうてなの上で会って、そこでゆっくり話をしよう、などというのは、全く常の人の人情を超えているのであります。

この手紙は大へんに長い手紙で、まだこれに続いて、念仏の心得や仏の来迎について、浄土の教えが細かに説かれているのでありますが、それはしばらくおいて、一たいこの非人情はどこから出てくるのでありましょうか。熊谷直実へ与えた手紙に書かかれていることはまだしも、ここに書かかれているような、人間性を見つめてついにそれをつっぱなしたという冷たさはどこから来るのでしょうか。それは薄情とか不人情とかいうのではなく、非人情、超人情

というべきものでありますが、それはどこから生れるのでありましょうか。われわれお互は不断、人間同志の関係で、つまり人間と人間としてお互に結ばれております。愛するとか憎むとか、好きとかきらいとか、助けるとか邪魔するとか、みな人間と人間との関係においてやっていることとであります。ヒューマニズムの立場というものは、こういう人間同志の関係に立って、愛したり憎んだりしているのであります。そういう限りでは、親への孝養は本願の行ではないから、「たえんに従いてなすべし」できるならやがよい、といって孝養に第二義的な意味をしか与えない、ということとは不人情でありましょう。また親しい弟子が重態だという報らせを受けて、今は別時念仏の修行中であるから見舞には行かれない、いずれ極楽で合ってゆっくり話し合おう、などというのは人間として不人情の上ない、といえるのでありましょう。しかし人間と人間との関係に立つ限り、ほんとうに人間を救うことはできないのであります。人間的な愛は憎しみと裏表をなしている愛で、一度ひっくり返せば、すぐに憎しみとなります。ほんとうに人を救う愛は憎しみを伴わない愛でなければなりません。それは人間が人間と相対している立場を超え出でて、人間が絶対者、如来に向って相対している関係に立たなければなりません。人間性を超え出でて、如来との関係に立ったと

きに、ほんとうの慈悲心を得て、人間を愛することができるようになるわけがあります。人情とか不人情とかを超えて非人情に立つことができるわけがあります。

法然上人は、いまは別時念仏の最中で、外へは出られないが、正如房のために、心を籠めて念仏の一つ一つを振り向けて、よりよき往生を願おう、と次のように書いております。

「かように念仏をかき籠りて申候わんなど思い候も、ひとえにわが身一つのためとのみは、元より思い候わず、折しもこの御事をかく承り候いねれば、今よりは一念も残さず、ことごとくその往生の御助けになさんところ廻向しまいらせ候わんずれば、かまえてかまえて、おぼしめすさまに遂げさせまいらせ候わばやとこそ、深く念じまいらせ候え。」

こういって、南無阿弥陀仏の一つ一つを正如房の往生に振り向けて、如来の大慈悲の加被をお願いしているのであります。偉大なる非人情と申すべきであります。(NHK 第一より放送の要旨) (終)

(文学博士・大正大学教授)

(童)(心)(仏)(心)

四十八の字

これは、おとうさんから聞いたことです。おとうさんは子供の時に、なんとか早くおとなになりたかったんですって。それで鏡を毎日眺めて、おとなの顔を真似たんですって。そして、眉間に八の字のたてじわをよせることにきめたんですって。

(それからずっと、今でも、おとうさんは眠っている時でも、八の字のしわがあるんです。)

そしたら、四十八才まで(しじゅう八)、ちっともい事がなかったんですって。

八の字をよせる癖。眉間のたてじわ。おとうさんは、今、とっても後悔しているんですって。

(僕は、おとうさんから、この話を聞いて、僕は絶対に八の字のしわをよせない事にきめました。四十八になるまで、幸福にならないなんて、つまらないんですもの。)

(淵)



新安安保条約批准と

新聞の責任

青 砥 信

ふだん新聞にあまり関心を持たない人たちも「この頃の新聞は変わってきた」と感じ、不審の念を抱いているのではないでしようか。

動についても

「この朝、国民の足は完全にマヒしたものの、さしたる混乱もなく整然と行われた。

これは新安安保条約に反対する国民の赤裸々な希いの表現であり、岸内閣、自由民主党の横暴を憎む声に他ならない」(A、M、S。Y紙など)

というのも、去る五月十九日行われた自民党による衆議院の会期五十日間延長の単独強行採決、それに続く二十日未明の日米新安安保条約の強引な可決について、新聞は『国民の意思を無視した暴挙』と痛烈に非難し、さらに、それを契機として盛んになった全学連の国会デモや、六月四日の安保改定阻止統一

行と論じ、新安安保改定阻止と岸内閣即時退陣、国会解散を強く主張していました。また新安保の国会審議では、極東の範囲、事前協議条項などをとらえ、安保は戦争の危機を呼び込

むもの。日本を世界戦争に巻き込む恐れがあると、国民が持つ当然の不安を代弁するのに紙面を惜みなく解放してきました。

ところが、誰しもが感じる「新聞論調の鮮かな転換ぶり」がクローズ・アップされたのは、六月十一日ハガチー米大統領領新聞係秘書一行が、羽田空港で社会党、労組、民主団体全学連反主流派学生らデモ隊約三万人に取囲まれ、乱暴を受けた、いわゆるハガチー事件からでしょう。

その日の夕刊、翌日の朝刊は、一斉に「デ

モ隊の行動は客を迎える態度ではなく、日本の後進性を世界にさらし、国際儀礼に反した暴挙である。その陰には、日米の親善を離間しようとする左翼の魔手が秘められている」ときめつけました。それと共に「アイゼンハウワー米大統領は、日米修好百年祭の記念行事として訪日するもので、あくまで日米の親善が目的である。このアイク訪日を新安保成立や、岸内閣のテコ入れと解釈するのは間違っている」と、国民の眼を岸内閣失政から反らす方向に転じました。

「暴力否定」 「アイク訪日の公的見解」を表面に打出した論調には、反駁の余地もないのですが、前日までの訴え方と裏腹な面を感じることは否定できないでしょう。「政府はアイク訪日前に是が非でも新安保を国会承認に持ち込み、これをお土産にして内閣の延命を策している。しかも、新安保が参院で自然承認される同じ十九日に、アイク訪日が重なるのは、偶然とはいえない作意がみられる。政府がいくら懸命に否定してみても、訪日を政治に利用している」 事實は覆えない。このままでは国民は納得しないだろう」と、岸

内閣の巧みな議会運営を衝いてきた同じ新聞なのだろうかという疑問を生じさせました。新聞はアツさり、「転向」したのです。しかし、このハガチー事件当時の豹変ぶりは、まだニュース面に現われなかっただけ、読者としては救いだったのです。

警職法改悪で世論、ことに報道関係の激しい反撃を受け手痛い目にあった岸内閣は、新安保条約を成立させるについて、新聞、放送機関に払った努力は並々ならぬものがありました。「新聞を制するものは、人民を制す」これが岸内閣が警職法以来とってきた命題です。だが、露骨な言論統制は通じません。独自のPRをする一方、時にふれ報道経営陣と懇談会を持ち、時局乗り切りの協力を求めました。それも岸内閣には残念ながら、「我に利あらず」といったところが、この時までの実情でしょう。

岸内閣は「新安保批准に政治生命をかけている」と表明していたとおり、安保への執心はすざましい限だったのです。「ホレれば痘痕も黚」どころではなく、一種の狂信に達しています。何故かといいますと、安保あつ

ての岸信介だったからです。

批准に漕ぎつけなければ、退陣後の岸派（自民主流派を含めて）は、道化師に墮ちるからです。日米経済の紐帯を強固にし、稼ぎまくろうという財界から見放されます。もつと大きな悩みは、自民党の派閥、いかえれば実勢から取り残され、政治家として終りになるからです。吉田元首相が、今も隠然たる力を政界に占めていられるような力を内閣に維持しておきたいからです。このような秘かに隠された岸首相個人の野望が、新安保の強行単独採決に走らせ、国民の総反撃を喰う結果となったのです。

新聞、放送はあげて岸首相の失政を攻撃してきました。そこで岸内閣は一そう露骨に報道工作に乗り出したのです。まず連日のデモ事件が社会不安を呼ぶようになったある日、岸首相は、在京新聞、放送関係の経営者を官邸に招きました。席上現在の政局や日米関係を説明し、内閣支持の方向に世論を盛り上げて欲しい旨をそれとなく要請したとのことです。次いで今度は、マッカーサー米大使が、アイク訪日に際しての治安対策を理由に、編

集局長級の責任者を呼びつけ、これも同様な協力要請を依頼したのです。

“言論規制”を言外に匂わせてのこの要請は、新聞の紙面にハッキリ現われてきました。安保に反対、岸首相の退陣を叫ぶ全学連主流派学生が、国会に突入、東大四年生の櫛美智子さんが死ぬという悲惨事が発生した六月十五日、その時からです。新聞は明治以来の歴史にあって、かつてないほど忠実に国民の声を代弁し、国民と密着して来た名誉を、この日を限りに自からの手で捨て去り、権威にひれ伏し、敢えて岸内閣の走狗と随したのです。

六月十五日、当夜のテレビは、頭を抱え逃げ惑う無手の学生に向って警棒をふり下す警官隊の喧嘩慣れた行為を生々しく伝えていました。正常な感覚を持った人なら誰でもが、権力をかさに着た警官隊の暴行と感じ、職務執行の行き過ぎ、逸脱を認めたことでしよう。ところが、翌朝の新聞をみて、多くの私たちの間から『新聞は正しいニュースを伝えていない』という不満の火の手が上がりました。

テレビの画面から受ける生の感情と紙面に編集されたものとの差異は自ずから違いのあるのは当然としても、新聞はニュースの取り上げ方にある偏向が認められました。社会面の例をひくと、いつもは新聞が好んで用いる感情に訴える見出しが影をひそめました。見出しも記事の一つと見做されている点からすれば、記事の情景をうたい出すのが当然であるのに、敢えて冷たくとりすました表現を使い、警察当局の逸脱、乱暴を思わせる面は最少限の表現に押えてありました。さらに、中には、警官隊の追打ち、政府が不利となるような写真は、総て紙面に現われず、デモ隊側の一方的暴行を匂わす見出し、写真で構成された新聞も見受けられました。

聞くところによると、某新聞社では、第一線の取材記者が送ったニュースが、上層部の指示によって、ズタズタに書き直され、当局側の不利を意味する個所は姿を消したとのことです。

新聞をつくる実際の仕事にたずさわる取材者、編集人は、新聞労連の組合員たちです。少なくとも、これらの人たちは『こんな紙面

をつくる心算はなかった』と嘆き、相当のレジスタンスをしたと信じられます。では、それにもかかわらず、どうして不本意な、意図しない新聞が刷り上ったのでしょうか。ここに、経営陣ひいては岸内閣、与党自民党の予想以上の激しい圧力が、本来自由なるべき言論界に加えられた証左を認めざるを得ないのです。

マスメディアのなかでも、新聞がまき散らす影響力は、まだまだ強いものです。岸内閣、自民党一流の既成事実——即ち新安保強行採決、アイク訪日問題など——を批判の場から棚上げしてその時、その時の現象面だけ——例えば国会デモの暴力批判——を強く打出す、問題意識のすり変えは、国民を戸惑いさせ、正しい世論の成長にブレーキをかける結果となったのです。

六月十五日の国会デモ死傷事件を境に、さらにハッキリしたこの問題意識のすり変えは、多数人の批判を浴びました。それにもかかわらず、十七日在京七社は、『暴力を排し議会主義を守る』という共同宣言を発表し、政治、社会混乱の“よってきたところ”から

眼をそらす方向に乗り出したのです。政府与党はこの宣言を、水を得た鯉のように喜んだのです。「新聞御し易し」とみて取った岸さんは、十九日の新安保参院自然承認に次いで、一気に関係国内法の抜打ち成立を、自民党単独で強行しました。それでも新聞は、鳴りを静め当然の論評をひかえたのです。「過去のいきさつはどうあっても、議会主義を守ろう」と宣言した立場上、明かに多数党の暴挙と認められる。これら一連の悪政を、議場の法的手続きに非はなかったとして、見過したのです。ここに至ってかってなく国民と密着していた新聞は、自から全国民の期待を完全に裏切ったのです。

岸さんは、数多くの新安保反対陳情に一顧もくれず、国民の声を無視して深夜の批准、デモ隊を恐れての批准書交換にみられる隠密調印と、不様な幕切れでやっと退陣を表明しました。しかし安保条約は岸さんの目的どおり成立したのです。国民に認知されない日陰の子。安保条約をめぐる紛争は、今後益々激しくなり、その度に、新聞は右、左と論調を繰

り広げるでしょうが、人々は過去にとった新聞の責任、即ち新安保成立をめぐる示した態度を決して忘れてはなりません。

新聞の世論に対する感覚、反応は驚ろくほど敏感です。全国に岸排撃が拡がり、自民党内の岸批判が強まれば、筆先を転じその尻

馬に乗る芸を心得えています。それは商業紙の運命であり、限界ですが、それだからといって、過去に果たした新聞の役割が帳消しになるものではなく、その責任はあくまで追及されるべきでしょう。

故郷

人というものは何処へ行っても、故郷を忘れることの出来ないものである。良寛が

に、人の心はこもり、人のおもいはとどまっている。心なき自然であっても、そのたずまいは人の目にふれ、人の心をとらえたものであり、何にもまして人をはぐくんだものである。その自然はもはや単なる自然ではなくして、人の心を深く宿した自然である。

草枕夜毎にかはるやどりに

結ぶはおなじ古里のゆめ

と詠んだように、旅ゆく先は変わっても、変ることのないのは、故郷へのおもいでである。

故郷をおもう心は、人間の生命の本源にねざすところの、根源的なものである。いわば本源から離れたものは、すべて本源に帰ろうとする天地の道理にみちびかれる心である。人はこの心の働きに動かされて、故郷の声を聞くのである。

旅にあつて故郷をおもうのは、故郷それ自体の中に、そのように思わしめるはたらかきがあるからである。故郷の山は青く、故郷の水は清い。その清い山、清い水の中

私たちは毎日の生活の中に、第二の故郷を見出して、毎日を通したいものである。

円光大師法然上人御影

水鏡の御影

一

写真の無い時代、画は、有難い調法なものである。万人に喜ばれたのである。画は文字と異なり仮令文盲の者であっても、一見して「知る」「判る」ことが出来たのである。日本の大和絵が世界第一に発展した事も、日本人が人情こまやかにして実意があり、風流を理かいしたことに外ならない。昔の行事を伝える絵巻物などを見る度に、作者の風雅と情熱には自然に頭がさがる。

墨一色で自然の現象を収め、見るほどに飽がこない、支那には破墨だのいろいろの

筆法が発達し山水画の母と云われているけれども、日本の絵巻ほど、いたれりつくせりと云うこまかい筆致は少いと云える。

前後を見られては、事実と違ふところを胡粉を塗って、心行くまでなをされた、そうして、これこそ似ていよう。と、勝法房に賜ったのである。

二

大師法然上人の弟子に勝法房という画才にたけた人がいた。勝法房については浄土伝灯總系譜大師門下表中或は七ヶ条起請文「宿老たるもがら八十余人」の中に見えない。併し大師に面授のお方であったことは御伝の示す通りである。

勝法房としても、さあ画きますと、大師をモデルとして画き上げたものではなく、大師の御氣付になられない間に、画いたものに相異なる。

つねに大師につかえ念仏に精進していたが、ある時、大師の真影を画き持参して、大師に其銘をおねがいしたのであった。

併し兎も角出来上ったから、記念に銘をいただきたいとしたのであった。

勿論、銘をおねがいする位であるから、本人としては最上の出来ばえと信じていたのである。

細心の注意を持たない人ならば「よし」とばかり、銘を記されたかも知れない或は氣むづかし屋ならば、言下に駄目だ、又は「よく出来ていないじあないか」といつて却下したかも知れない。

その時、大師は、その真影を御手にとつて、よくごらんになり、改めて鏡二個を左右の手にとられて所謂水鏡して、おつむの

大師は差出された絵を、よく御らんになつてニコリと微笑せられた。

直ちに「たらい」に水が運ばれて大師の前に置かれたのである。ついで二個の鏡が

用意された。大師さまは鏡二個をつかつて「おつむ」の具合、不出きの線なぞと丁重に直された。

大師さまは、心の弘く、御氣持がつねに春の海のように、おだやかであつた証拠である。

特に時間をかけて、丁重に手入れされたことは、弟子とはいえ勝法房の心を充分に汲みとっていられたからである。

その人格を尊敬されておられたことは、大師とその弟子との関係を見る上に於て大切な点である。

三

かりに大師が人情こまやかでない人としたならば、勅修御伝に見られるような弟子との親しい関係を見ることが出来ない。大師さまは対機の説法を随時行われたが、一見相手の機根を見抜かなければ、出来ぬ相談である。ここに大師さまの勝れた法器を見る。

大原問答に見られるような、始終かわら

ない悠々たる態度の中に、打てば響く、心持よさを蔵していられたのであつた。

元久元年冬の頃、大師の念仏を停止すべく、山門（延暦寺）大講堂に、三塔の大衆三千有余名大會議を起し、浄土宗にとって風雲急なるものがあつた。そこで大師は、

十一月七日洛西嵯峨二尊院に在って、七箇条の起請文を認められた。その座にあつた宿老八十八名が署名したのである。ききつたえた者が相ついて百二名署名している。その結果起請に署名したとして不測のさい難がふりかかるかも知れたものではなかつたのである。

この重大なこと柄に対して、あとからあとからと署名したことは、弟子達の大師に対する信らいに外ならない。そして大師の「ほうよう力」を知るものである。金銭ではない、実意の問題である。大師は行為に表裏がない、弟子に対して区別をしなかつたからである。換言するならば、相手の人格を尊重していたからである。

大師像の似ないところを、直しているこ

とは、至誠のなすところで、誰にも悪感情を、いだかせない。而もその直し方は、自分も相手もない、極めて自然の在り方であつたらしい。

四

御伝には、
銘の事は、返答にをよばざりけるを、勝法房、後日に又参て申出たりければ、上人の御まへに待りける紙に。

我本因地 以念仏心 入無生忍
今於此界 撰念仏人 帰於浄土

と記し賜つたとする。偈文は首楞嚴經にある勢至の円通の文である。

水鏡でお直しあつた時には「銘」はいたけだなかつたのである。勝法房は十二月十一日に再び参て、銘を求めたのであつた。前にあつた紙に、前文のように勢至の円通の文を書いていただいた御伝には、

上人（大師）は勢至の応現たりと云ふこと、世挙てこれを称す。しかるに、おほくの文の中に、勢至の御詞を、自賛に用られ待る、まことに奇特の事なり。今彼真影を拝したてまつるに、胡粉を塗て、なをされたる所多し。これ末代の亀鏡たるによりて、彼御自筆の本を写て、此絵に加置ところなり。言々
とある。

隆信大師御影

一

後白河法皇の京都法住寺殿は大変なにぎわいである。この日法皇には、山門と三井園城寺の大学者僧を請待、番々に「往生要集」の講話を聞かれた。

大師も召によって参じていたが、法皇の仰によって開講、その講話の中で、

往生極楽のためのみ教や行法は、濁世末

代までの大切な目足なり、道俗貴賤誰か帰せざらむ

と、一段とさわやかに申されたのである。法皇には、

はじめて、きこしめさるるやうに、御きもにそみて、たうとく、御感涙はなはだしかりけり。

と伝えられる。大変な感激であらせられた。

一たび無常の風が吹いた時には、僧であろうと俗人であろうと、或は身分の高い方然ざる人であろうと「待った」なしである。又は山なす財宝あり、多数の眷属があつても、いかんとも致し方がない。生れきたままの姿で一人旅に出る訳である。

大師は格別に変つたことを申された訳ではないが、一段と明了に申されたところに意義深いものがあつた。

法皇の側近にゐた右京権太夫隆信朝臣に仰せられて、

「上人（大師）の真影を図して」蓮華王

院の宝蔵に収められたのである。

二

この日時は盛衰記に云う、養和元年閏二月二十五ではなからうか、大師は同月二十三日には、入道前権大納言藤原邦綱朝臣の臨終善知識をつとめている。邦綱は安徳天皇の乳母であり、平重衡夫人大納言佐局の養父であつた。大師は時に四十九才の春である。

法皇が諸講師の中の大師の御影だけを、隆信をして画かしめられ、御願寺である蓮華王院宝蔵に収められたのは、勅修御伝に先代にも、その例まれなる事とぞ申あへりける

と記している。

蓮華王院は、法皇が長寛二年十二月二十二日落慶、十七月御願供養、安元二年四月二日法住寺殿内に九間三面の精舎を建立干一体の千手観世音像を安置供養せられた由

緒寺院であり、宝蔵があつて法皇の宝物大事なものに収められていた。

大師の御影も亦大事な宝物として、之に収められたものである。

法皇の御めがねに適つて、大師の御影を画かれた隆信も亦、当時画の上手として而も法皇のおぼえめでたい公卿でなければ、その光榮をうける筈もない。

三

隆信は保延六年為隆の子として生れた。

その遠祖は閑院冬嗣であつた。兼実の一門である。実名は隆実と呼んだのであつた。

翼賛には上野介、右京權太夫、若狭越中守中務大輔に歴任正四位に叙されたとする。

父為隆の時から大原に住み、和歌をよくし又画人として名があつた風流人であつたのである。建仁元年（一二〇一A・D）出家

戒心と云う。六十一才の時であつた。戒心と云う名の示すように、氣儘に風雅を友としていたものらしい。元久元年二月二十五

日六十四才で逝去、彼は兼実公を通して、大師の教化をうけてゐるうちに漸次念仏の

信者となつたのである。御伝には、

ふかく上人に歸し、余仏余行をさしおきて、ただ弥陀の一尊をあがめ、ひとへに念仏の一行をつとむ。つゝに上人にしたがひて建仁元年（六十一才）出家をとげ、法名を戒心と号す。

一向専修の外、他事なかりけり。生年六十四才の春、所勞危急にをよぶ。上人きき給て、住蓮安樂の二人の門弟をつかはして、知識とせられけり。すでにをはりにのぞむに、二人の僧を左右にきて病者と知識と同音に念仏し、來迎の讃をとなへ、端座合掌して往生をとぐ、元久元年二月二十二日なり。

紫雲音楽以下の奇瑞一にあらざ、後に正信房かの墓所に向つて念仏したまふに異香なをうせず云云

と伝えている。

大師からのお言ばで、臨終の善知識として往蓮と安樂が、大原の隆信邸に行き、臨

終に當つて、隆信は西に向い二人の僧を左右において同音念仏、來迎讃をとなえて端座合掌して往生したのである。臨終の善知識の「在り方」が目に見えるようである。本人の信仰の深さ、その法悦が見えるようである。この場合には五色の糸をひいていない。

糸ひき念仏ではなかつたのである。糸ひきの場合は五色の糸をひくのであるが、仏の左手から、ひく人は左右の手にてひくことが正しいとされる。

隆信の臨終近いことをきかれた大師が、住蓮安樂の二僧をおくられたことは、隆信はじめ一家の人々が、よき念仏者であつたからであらう。

（村上 博了）



近代高僧伝

久我誓圓尼

四力年にわたる修業の後には江戸に出、天保七年十二月増上寺で宗戒兩脈を相承、翌八年七月には善光寺上人となり、大本願の住職となった。時に春秋僅かに十歳。

善光寺は大本願と大勧進に分かれ、前者は浄土宗に、後者は天台宗にぞくし、兩者ともに顯門から入って住職するならわしになっていた。大本願は「尼宮さま」として、全国幾百万信徒渴仰の信仰的中心の尼公上人を擁しているが、宮家から入って善光寺上人となつたのは、蓋し伏見宮から入って門跡となつた誓円が初めてであつたろう。彼女が邦家親王を父として出生したのは文政十一年正月七日のことであり、幼名は万喜宮。幼少の頃より經文を暗誦したり、仏に手をあわせ礼拝することとを殊のほか喜んでといわれ、従つて兩親たちも、当時皇族の多くが仏門に入つた例か

らしても、これをおさえることもなく、寧ろ心のままに出家を許すことになった。時に六歳というあどけなき春のこと。春とはいえ二月も半ば、信州の山々には未だしろがねの雪が降りつもっていた。その中をはるばる都をうしろに木曾路に入つた、稚児輪の振袖姿万喜宮の心は如何であつたろうか。一山の僧侶や信徒たちは丹波島の渡しまで出迎えたが、このいたいけな姿を拝して、かえつて彼等は思はず涙ぐんだとさえいわれる。そして三月四日には智沼について得度をうけ、名を誓円と改めた。智沼は中御門宗美の息女であり、以来師について宗乗を学び、又法儀を修し、

燈いよいよ四海に輝くべし」と言つては互に喜びあつたという。寺では尼公には一切金銭を手につれさせることはせず、又お金のことを「おばけ」と呼んでいたらしく、出家後初めて兩親にあつた時の最初の言葉は、「お堂ではお経をよむと、お参りの人がおばけをなげる」といつて、付添いの人は却つて思わず微笑したというが、これをもつてしても其の一端をうかがうことができるであらう。戒律では金銭の所持は許さないが、例え生涯を持戒堅固にすごされたとはいえ、誓円にしてお金を持つことをしなかつたのは、俗縁にふれることをさげんとする、一山の人々の心やり

からであつた。越えて弘化四年三月には大地震におそわれ、犀川の流れもとまり、家も倒れるという始末。善光寺一山もその例にもれず、大本願と仁王門はこわれ、金堂や山門は難をまぬがれたとはいうものの大破損をうけ、以来これが復旧に力をそそぎ、十月には大本願の再建成り、嘉永六年七月には鐘樓が、元治元年八月には仁王門が再建されて旧觀に復するまでになつたが、これより元文五年二月幕府は大本願をして、浄土宗なるにも拘らず天台宗日光輪王寺門跡の支配下におく旨申渡された。これは例え何が故であるかは知るに由ないが、大本願が輪王寺によつて、其の支配下に置かれるに至つては全く面目がない。言語道断であるとし、これを理由に誓円は江戸青山の善光寺に去つてしまつた。

慶応三年十二月大政が奉還されて日光門跡は復飾し、その支配下から脱することを得た大本願に帰られた誓円は、翌四年二月上洛したが、時に道中警護の武士としてあてられたのは松代藩士三十名ばかりであつた。しかしこれだけでは不足であるということ、有志

をつのり大本願直属の、しかも譜代の小作人七瀬の二三男も十数名かり出されて、俄か武士に仕立てられ京都にのほつた。時に皇居には薩長土肥の武士たちが警固しているとはいふものの人手が足りない。そこで目をつけられたのは善光寺上人に供奉して上洛した武士たちである。「大本願の家来とあるからには心おきなし」ということで、信州から出て来た小作人の二三男も禁裏の守衛士に採用されて居残ることになつた。彼等にとつては全くの幸運、故郷に帰つてなまじい農業にたづさわるといつても、次三男にしかすぎない。生活困乏の中にあるよりもということ、滞在し、遂に叙位もなされ、いっばしの武士となった。それから何年かの月日がたち、明治天皇は東北に巡幸なされることになり、偶々長野を通過することになった。大門町をしづとねり行く一行の中に、曾って誓円に随従して上洛した俄か武士の姿を見つけた人たちは、「七瀬の小作人の忤何某が行くよ」といつてささやきあつたということである。

明治元年十二月京都より大阪阿弥陀ヶ池和光寺に移り、大本願には弟子大炊御門誓薫を

副住として留め、自からは七年目毎の大開帳にのみ帰山することになった。この頃皇族の出家を許さないという勅命が出される一方、廃仏毀釈、出家している宮に対しては還俗をすすめた。誓円にも「速に御還俗して、然るべきところに御縁組なさつては」という達しもあつたが、「身にまよつてゐる袈裟衣はとすることはできても、心につけた衣をどうしてとることが出来ようか。剃刀をもって剃った黒髪はのばすことができて、心にそつた髪はどうしてのばせよう」という固い決意によつて還俗を思いとどまり、一時あつた善光神社をつくりたいという評議もけり、籍は久我家に移され久我通明の養女とされたといふものの、法のため一身を捧ぐべく強く誓つたのであつた。同六年には青山善光寺(東京)、五条袋中庵(京都)和光寺(大阪)に女教院を創め、二十八年には知恩院山内に得浄明院を創建、三十三年大僧正に昇任されたが、四十三年十二月十二日寄る年波に抗しきれず八十三歳をもって遷化された。法名を本蓮社覺譽上人順阿誓円大和尚という。

(大橋 俊雄)

善も悪も世のならい



吉 野 翠 幹

し、婆やの話を聞いて悪因悪果の恐ろしさが身についてしまった。そのため実際に人が見ていようといまいと、ささいの悪事すらなし得なかったものである。

地獄の苛責の激烈さは、考え得られる程度の域をこえている。まず地獄には悪事の種類によってゆく先の場所も違っていて、責苦の内容が罪業の種類を憶わせるようになっていいる。一例をあげると、賄賂や情実によって利益を与えた役人や、法網をくぐって富と名誉を得た人たち、これは妄語の一つであるが、この者が地獄にゆくと、身体の中に蛇を生ずる。この身中蛇は、すべての筋肉にも血管にも行きわたり、あらゆる内臓を食い尽し、身中をのたうち廻る。そしてその苦しみは火よりも重く、火よりも激しいと説明されている。この責苦は自分の身体の中の苦しみで、身体が火で焼かれるより烈しい自覚的苦悩であるというべきものである。

邪見の人が地獄にゆくと火焰に焼かれ、火焰に追われること久しきに亙る。そしてやっとな火焰の苛責を逃れて、逢かに美しい村落と

一、地獄のあれこれ

母親からお小遣をもらって、さてこれで明日のお縁日には何を買うか、嬉しさに胸をふくらませていると、きつとそばから婆やがこういった。

「お盆の十五日には地獄の釜のふたがあくんですよ」

そして悪いことをすれば、地獄におちて釜に入れられ、青鬼赤鬼が釜の下からさかんに薪をもやすという恐ろしい風景にきき耳をた

てたものであった。更に話は続いて嘘をつくと閻魔さまが舌を抜く話、盗みをする針の山に追い上げられる話、その他血の池、熱鉄のこと等を、十燭光の電燈の下で、婆やが話す地獄のあれこれは子供にとって実感の伴った話であった。

それから何十年たった今でも、その時に婆やの話で身震いしたことを忘れない。今の考え方からすれば、荒唐むけいの話をして子供を怯えさせるというって非難されるかも知れない。しかし、婆やには決して悪意はなかった

満々と水をたたえた河を見出す。希望にもえてその村落に辿りつけば、今までの風景は急変して天をも焦す大猛火となつて燃えあがり、叫喚の声すら炎に焼かれてしまふ。これは獄焔を逃れた罪人に対して、猛火が暫時化現の相をもつて一応喜ばせ、実はその苦しみを倍加させるための手段であつたことになる。

慈悲心がなく父母を虐待し師長を敬わない者は剣林地獄にゆく。この者の身体には酒色という粘土状のものがにかわの如くねばりついている。これを切り去ろうと利剣に手をのばすと、その利剣は鏡に写つたもので、たちまち消えてしまふ。鉄嘴をもつた虫に追いかけられ剣の樹にのぼり又降りる。剣樹を上下すること一日一夜に八万回で、毎回生死の苦を受ける。

その他財物を蓄えて施しを知らぬ者、暴利を貪った者、その他いろいろの者のゆく地獄の相は、実に雄大であり、苛烈を極めて描き出されて止まる所を知らない。

こうした肉体的苦痛に精神的苦痛がともなつて繰り返されてゆく地獄の苛責は、仏教で

よく用いられる無限さの一つの表現である。しかしそれでも終りということがあつて、苦しみを克明に一つ一つ描写し、そして最後には

「この罪畢つて、善知識に遇い、菩提心を起す」

の文を附け加えることを忘れない。

二 帝釈天の働き

帝釈天は平和主義者の仏さまである。その反対に阿修羅は軍国主義者である。いつものように阿修羅は他の天部と戦争をするために用意万端を整えて、いざ開戦ということになった。そこで帝釈天が阿修羅の所に行つて、次のような問答を試みる。

「阿修羅さん、お互に殺し合うことを止めようではありませんか。話して解らぬことはない筈です。十分に論議をつくして、それで負けたら、負けた方が降伏すべきでしょう」「なるほど、それなら論議の勝ち負けは誰がきめるといふのです」

「それは両軍からそれぞれ智慧明かで、良識豊かなものを選び出し、中立の委員会を組

識すればよいでしょう」

「いやいや、これまで私が忍耐して利益を得たことがない。忍耐とは憶病者のすること、私は損をしたくないのです」

「それは違います。自分の理論を主張すると同時に他人の理論も認めることが重要なのです。阿修羅さんも相手の天部も平和が保たれるならば、忍耐こそ最上の手段といわなくてはなりません」

「兇惡な牛を放っておけば、必ず人を傷けるでしょう。愚者は制しなければいけません。杖を以て強制し、怖れさせ、力で調伏するのが正しい道というべきです」

「阿修羅さん、もし私ならまずその愚者をよく見守ることでしょう。愚者に対してただ強制するようなことをすれば、愚者は必ず怒ります。しかし静かに条理をつくして論じれば必ず解ってもらえます。そうすれば愚者といえども賢者と同じことになるではありませんか。もし烈しく怒る者があつたとしても、それは狂いたつた馬車のようなものです。この馬車に必要なものは、これをのりこなし静かに御せる腕のよい御者であつて、決

して馬を鞭うつ杖ではない筈です」

さすがの阿修羅も、帝釈天の説得にあつてよく判り、兵をおさめて帰って行った。

帝釈天は平和主義の仏さまであるとともに実は二重神格の所有者でもある。即ち帝釈天が善人に会うことがあれば、その善人に対して帝釈天は慈心を満面にたたえ、善行を賞め且つ励まし、ますます善行を積むように勧め、その反対にもし悪人に会うことがあれば、帝釈天たちまち怒髪天をつき、口がさけ、恐ろしい面相となつて、天地を震がす大音声をあげて悪人を叱咤する。彼の罪をなじり、再び罪を犯し得ないようにする。

このように帝釈天は善人にやさしく、悪人には恐るべきものとなつて世の中を導く。しかしほんとは帝釈天に会わなくても、誰でも日にその教訓を得ている筈である。即ち日常にみる老と病と死とは、われわれに無常を知らせる三人の天使である。われわれはこの三天使に会いながら、天使に対して眼を覆い、耳を掩うて認めたがらないのが現実である。われわれを導くために派遣されている三人の天使をみながら、それと気がつかず、閻

魔の庁で、天使に出会わなかったといい、悪の反省をしないので、結局は地獄にゆくしか方法がないわけである。

従つてわれわれの進むすべての道は地獄に通じてしまう。

「四つの門が四方にそびえ、

あらゆる道は、この門に通ずる。

鉄の柱、鉄の網が覆いかぶさり、

鉄の大地には自ら火焰がもえる」

しかし、地獄は恐しいが、決して死後ばかりの世界でない筈である。ここにまた反省の句を忘れていない。即ち

「愚かなる者は常に喜び暮すこと

かの光明満つる天にいる思いをなす

智勝れた者は常に恐れを抱くこと

なを地獄への道に立つ思いをなす」

三、人間の姿をみつめる

毎日の暮しで、そのときどきに私たちは懺悔を怠つてはならない。誰も御存知のように懺悔は、もろもろの悪業が、各自の貪りと怒りと愚かさから生じることを反省するのである。よく十悪ということがいわれるが、これ

も貪り、怒り、愚かさが原因となつて出てくるものである。また毒矢の論えもこのことである。貪りと怒りと愚かさという毒矢あつて、もろもろの病を起す。そして「外から来る毒矢なら、これを妨ぐ方法もあるが、内から来る毒矢には妨ぐ方法がない」という言葉も有名である。

さて、十善といへば、ユダヤ教の十誡に当るように簡単に考える人が多いが、この両者は根本的に違ふのである。

ユダヤ教の根本は、人間がこの世に暮す間は、人間が神を畏れ、又子孫に神を畏れさせるために、神がモーゼを通して人間と契約をしたのが石の板に認められた十誡なのである。聖書にはエホバは慈悲の神であると記した個所もあるにはあるが、明かにエホバは焼き尽す火、ねたみの神であると記されている。

映画等で知られているようにモーゼがシナイ山で神の声を聞くところの記述でも、「神はねたむ神であるから、神をにくむ者に対しては子孫三四代に及ぶまで罪を与える」とある。

古来ユダヤ人は、罪とけがれを自分たちか

ら追放するために努力し、これをエホバの神が人間に命令し、そして神を畏れさせることによって人間に守らせようとした。

ところが仏教の十善は、これと違って人間のあり方を深くみつめてきて、人間の本性を考へることによって、十善の必要なことを説いているのである。仏さまの言葉をかりていうならば、

「仏性を覆い包む煩惱に二種類のものがある。一つは理性の煩惱で見惑といい、他の一つは感情の煩惱で思惑という。そしてあらゆる煩惱の根本をなすものは、一つには無明であり、二つには愛欲である。

この無明と愛欲がもとになって、そこから貪りと怒りと愚かさが生じる。

心に貪りと怒りと愚かさがあれば、そのために口には偽りと飾りと悪口と二枚舌の悪が生じ、身には殺生と盗みと邪淫が生じる。これらの悪を十悪という。

知りながら偽りをいうようになれば、いかなる悪事でもなし得る。悪事をするから偽らなくてはならぬようになる。

人の恐れは愚かさから来るし、人の不幸も

難儀も、また愚かさから来る。愚かさはまことに人の世の病毒に外ならぬ」

このように十悪ということは、人間の本来の姿を見つめることから説いてくるのであって、従って、十善は人が人として正しく暮すための本質的な必要から守るのである。決して神が畏しいから守るというものでない。

四、戒はあるにしかず

五戒、八戒、十戒といろいろの戒がありその内容も違っているが、その中で共通して一番の重要問題であったのは、不殺生戒であった。

經典の中には同本異訳といって、經典の説く内容が同じでも、説明の仕方の少しづつ違う一類の經典がある。これは梵本が同じ一つのものであっても訳出された年代のずれによって、このような表現の内容に相異ができてきたのか、又は年代の経るに従っていくつかの梵本ができ、それが段々と訳出されたものであるのか、それは判らない。しかしこの一連の經典をならべてみると訳出された年代に従って、遂次系統的に表現内容に一つの進展が

示されている。

いま或る一類の經典をとりだして、不殺生戒について読んでゆくと興味ある変化のあることが判る。

その最も古い經典には、簡単に「殺すなかれ」と訳されているにすぎない。それが第二、第三と年代がたってから訳された經典には、単に殺すなかれと記すばかりでなく、その内容に互って説明されてくる。それで生けるものは、一切その命を奪ってはいけなさと、段々と厳重な戒となってくる。ところが更に後世になると、人間に害のあるもの、即ち蚊とか蠅とか毒のあるものとかは殺しても不殺生戒にふれないと、一つの除外例を挙げてくるようになってくる。

原始的な經典の同本異訳ではこの程度であるが、御承知の通りこの戒の意味は種々な除外例を設けるに至って、遂には自分の利益のため、自分の欲望のため、又は無益な殺生だが、この殺生戒の意味となってきた。そして殺生とは生物の生命ばかりでなく、刻々と過ぎてゆく生命自体を尊重する意味にまでなっている。

要するに正見正思、ありのままの人間のすがたをみつめてゆこうとする努力があるからこそ、同じ經典でありながら時代と共に、訳出された内容が時代に從つて変化し向上しているわけである。

キリストはモーゼの十誡を文字通りにはとらず、極力精神面を高揚しているが、十誡の本質にはふれていない、

姦淫の女が捕えられてまさに石でうたれようとした（死刑にされようとした）時に、キリストは「なんじらの中、罪なき者まづ石を投げうて」といって、女を助けたけれど、姦淫の女が石でうたれ死刑にされる律法を否定しているわけでない。

その他安息日に仕事をするにしても、病気の治療や飢えのための仕事を許しているものであつて、安息日に休む律法を否定しているわけでない。

ところが仏教においては破戒のものも無智のものも、お念仏を唱えれば、たとえ下品の極楽であるにしても往生できるのである。十悪を遠ざけ、十善に近よるように努力しなければならぬが、それはあくまで人としての

道であつて、仏さまの慈悲はかかることを根本の問題としていない。

こうしたことを法然上人の御法語から味つてみたいと思う。

「それ十重（十戒）をたもちて十念をとなへ、四十八輕（四十八戒）をまもりて、四十八願をたのむは、心にふかくこひねがふところ也」

「罪は十惡五逆の者、なをむまると信じて、小罪をもをかさじと思へし。罪人なをむまる。いかにいわんや善人をや」

「魔惡修善は、諸仏の通戒なり。しかれども当世のわれらは、みなそれにはそむきたる身なれば、ただひとへに別意弘願のむねをふかく信じて、名号をとなへさせ給はんにすぎ候まじ。有智無智、持戒破戒をきらはず、阿彌陀ほとけは來迎し給事にて候なり」

因襲再考

馬の遠乗りをしようとしたが片脚の拍車しかなかったので片脚だけ付け、他の一方はつけないで出かけた。

すると途中で友人に出あった。友人は早速そのことを見付けて、

「拍車が片方しかないじゃないか」といって訊ねた。その人は

「たとえ拍車は片方だけでも馬の片側が前へ進んで半分が後へ残ることはないだろうから大丈夫だよ」

こう答えて拍車した。勿論馬も人間も一諸に前の方へ進んでいった。

脚が二つ、靴が二つだからといって、すべてを必ず二つにしなければならぬという程のことではなからう。時には不可欠のときもあろうが習慣や因襲はこうしたことをして時々無駄を強要している。過去はそうだったんだから、といって無理に根拠もない、智慧の低く、科学のない時代のことを因襲する愚は止めたものだ。本当のことまで無駄にしてしまふから。

新編 百 喩 経 (7)

一九 犬の寝ている家

愚な子供が、母親と一緒に、知人の家に行った。

「こんどは、おまえ一人で、お使にくるんだから、道をよく覚えておくんだヨ」といわれたので、曲り角の家などを、しっかり覚えていたが、その家に曲る家の前に、犬がねていたので……これこれ、犬のねているのを、おぼえておけばよい……と思っておいた。

その後、この家を訪れようとしたが、どうも犬のねている家が、見当らず、まごまごしているだけで、とうとう判らなかつた。是は、江戸時代の小ばなしにあるが、世の中には、此の様な、浮雲のような、榮華を目印に、一攫千金を、目ざす者が多いのだ。

二〇 返らぬ愚痴

昔、荒五郎という悪者があり、二十年余に、四百人近い人を殺した。名高い盗賊だったが、或時、旅の女を殺し、着物をうばって、家に帰ると、彼の妻は

「この着物から見ると、若い女らしいが、何故髪の毛を、とってこなかったの、馬鹿な人だ、私がいって、とってくる」

といって、取りに行った。

荒五郎は、妻の恐しい心根に、あきれると共に、自分の罪の深さを感じ、妻から逃れて出家し、高野山に登って僧となり、手にかけた者の霊を葬った。

これは室町中期に出た、「三人法師」にある物語だが、いくら霊を弔ってもらっても、殺された者は、生きかえってほこない。

近頃は、人の命を、軽んずる者の多いの、何ということだ。

二一 嫁殺し伝説

各地に「嫁殺し田」というのがあり、太古、オナリ、といって、田植の時に、乙女を殺して、田の神に献げ、豊作を祈願する、風習があつた。

此の風習の遺蹟として、千葉、長野、静岡、栃木、熊本其他、各地方に、嫁殺し田、と名付けられた。地名が残って、此のオナリのあつた事を、伝説として、残っているのだが、奈良県明日番村の、飛鳥神社に、おんだまつり、として、その変形が、毎年行われている。

豊饒を祈るため、乙女を殺して、神に献げるといふ暴挙は、無論言語同断な昔の事だが、今も華やかな社会の蔭に、一部の者の、金儲のために、幼い者や弱い者が、多くの犠牲になっている事か。

(伊東挙位)

末法万年のはじめなり

「又いはく、法爾道理ほうにどうりといふ事あり。ほのほは空そらに昇り、水は下りさまにながる。——略——ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎らいどうは法爾道理にてそなはるべきなり」

〔黒谷上人語燈録一五〕

石原宥政

○
法然上人の御在世になられた長承二年から御入滅になられた建暦二年までの八十年間、つまりその御誕生たんにしょうの年から、お亡くなりになる年までの間——その間ほど、日本歴史の上に大きな事件の起ったことも、たぐいまれだったと存じます。

「平家にあらずんば人にあらず」とまで、羽振りと権勢とをほしいままにしていた平清盛たいらのきよもりが死んで、その後、平家一門を西海の底に沈めて、源頼朝よりともが天下を取りま

したが、その頼朝も死に、そして、彼は血を分け苦勞を共にして来た弟の経経をも殺害してしまふのです。勿論彼の長男で將軍職を継いだ頼家よりいへも上人の七十二歳の七月に伊豆の修禪寺にて殺害されておるのです。そしてまた上人は七十五歳の建永二年二月十八日に南都・北嶺ひやうりやうの合同強訴ごうしよによって土佐に御流罪になられたのでありますが、それから二カ月後の四月五日には、上人の道友であり、篤い信者であり、理解者であった前関白・藤原兼実かみみ（六十歳）が他界し

たのでした。

世に謂（い）う「源平時代の争乱」の渦のはげしさを身を以て体験せられました上人の心が、

「かかる時勢の動転の中には、如来の本願におすがりする念仏こそ、まさしく時機相應の救われる道である」

と、念仏流通（るずう）をもつて「末法滅の時代を救おう」とせられましたことは、まことに有難いことでした。

実は私はたまたまこの筆を執っております昨夜、昭和五年と、昭和六年生れである二人の大学出の青年官吏と話したのでした。二人とも、読書もしており、話し合っても情に激することなく、理論も整然としておりました。

そのうちの一人の青年は殊に熱心で、唯物史観による共産主義的な「科学的実証精

神」だけを信じており、

「僕は科学的に実証し得る空想を排した、手でつかみ、耳で聞き、鼻でかぎ、この肉体でじかに感じ得ることだけ信じているのです。僕は軍隊へ行つて、華々しく飛行機をかって、敵地に散華することを仕込まれて来ました、軍隊のクサイ飯を喰つて、戦地で死ぬことが神に対し、そして、真理に対し、絶対だと教えられました。——その僕等は、昭和二十年八月十五日の終戦によって、今迄、神と信じていたものが、ひっくり返つて悪とされ、すべてに価値顛倒が来たのです。——僕等はいきなり、虚無と、昏迷の、取りつく島の無い中に放り出されたのです。——何が痛手と言つて、誰も、何も頼れない、こんなひどい闇はなかったですよ。だから僕は大人への不信をいただきました。およそ、信じ得ぬのは大人だとおもいました。僕は唯心論も信じません。……」

と、その共産青年は言うのでした。

すると、他の一人は、

「僕等安月給取りにとつては、三十近い

歳をして、まだ結婚も出来ぬのです。それだけの収入もなく、依然として、ただ強烈な安い酒と、女と、如何に金を取るかが緊急の、そして、無上の希（ねが）いなんです」

と、語るのでした。

また、共産青年は、私が「静かに古典をひらくことです。ことに、仏典をひらいて、その中に、古人がどのように悩み、全身全霊をカケて、血の出るような求道をされたか……それを、軀（からだ）で読み取つて下さい」というと、

「仏陀？……おシャカ様？……あの人は印度の王宮に生れ、山にはいつて楽な修行をしただけでしよう。その程度のもので、どうして、僕等の苦しみがとけるでしよう」

と、軽く言い出したのでした。

そこで私は、

「いや、そんな心で、そんな色眼鏡をかけて、古典に対することはアヤマリです。今、数千巻ある仏典は、何百、何千人によつて、編集（編集）され、それ等の人々

は、めいめい、五十年なり、七十年の全人生を浄（きよ）い求道にささげた人です。

古典に対しては、仏典ばかりでない、バイブルに対しても、論語・孟子から諸子百家の典籍に対しても、虚心坦懐な態度が必要です。たとえば日本の歴史を調べる場合でも史料というものを、慎重に心して読み、その事件と、その時代の苦悩と、人々の叫び——いわゆる岸首相ではないが、史料の中に『声無き声』を汲みとらなければならぬのです」

と語り合い、夜も更けたので、お互に礼を交わして別れたのでした。

○

——私は、その時、二人の青年官吏と自分の差がどこにあるかを考えました。

そして、「歴史のもてる特異性」を考えました。つまり「敗戦……日本軍国主義の崩壊過程」です。

それから共産青年のもつ「唯物史観」と、私の心に育つて来た「大乘仏教による諸行無常の中に成仏への無上道を往く心。」そうした「史観の差」を考えたのでありま

した。

が、今の時代が「原子時代」として、一方で大きく「人権宣言」をしながらも、片方では大破壊力の魔手がちようりようしてゐる。こういう時代を「いまだかつて無かった、おそろしい時代」と見るでしようが、かえりみれば、法然上人御在世の京洛と、全日本の姿とは、これまた「法滅時」の悲嘆をそそる、おそろべき時代だったのです。

そして、人類は、今後、おそらく、「現代よりは、もっと悪い時代」にめぐり会わぬと誰が断言し得るでしようか。

そういった、

「諸悪の道を閉塞し、善趣の門に通達せしめん」
(無量寿経)

ためにこそ、法蔵比丘の四十八願が成就されたのですし、法然上人が、

「かん悦ずいにとおり、落涙」

せられた念仏往生の救済があったのでありました。

けだし、上人がその争乱あびの生殺与奪地獄さながらの時代に、

「この法こそ、真に万人救われる道」

と、時機相応という歴史観のうえに、おしく、念仏の大道を宣布せられたことは、左のお言葉にもうかがわれるのであります。

「仏の滅後第四の五百年にだに智慧を磨きて煩惱(ぼんのう)を断ずることかたく、心をすまして禅定を得んことかたきが故に、人多く念仏門に入りけり。則ち道綽(どうしやく)・善導(ぜんどう)などの浄土宗の聖人この時の人なり。いはんや此の頃は第五の五百年、闍諍堅固(とうじょうけんこ)の時なり。他の行法さらに成就せんことかたし。しかのみならず、念仏におきては末法の後なほ利益(りやく)あるべし。いはんや今の世は末法万年のはじめなり。一念も弥陀を念ぜんに何ぞ往生を遂(と)げざらんや」

〔黒谷上人語燈録一二〕
と教えておられるのです。

藤原氏は力を失い、あの権勢のおやだまであった清盛と平家は滅び、そして、源氏の頼朝も、またたく間に滅んだ。皇居のある京の街にも、地方にも強盗と殺人が横行し、人々はダマシ合っている。——それは、ふと彼の国会の玄関で絞殺(こうさつ)されたという樺美智子さんの死とつながるものを感じさせるのです。

今こそまさに、聖徳太子の、

「上和(やわら)ぎ、下睦(むつ)ぶ」

尊敬互譲の精神と道義とを取戻し、私達は偉大なる「仏教という霊的遺産」によって、起ち上がるべき秋(とき)であると信ずるものであります。合掌。

(三五・六・二九)

×

×

×

×

扉の御法語解説

建永二年（西記一二〇七）三月十六日に宗祖上人は京都を發つて配所に向われました。その途中では老若男女多くの人々を化導されて、念仏の業を益せられながら旅をされました。中でも遊女を化益されたことは有名であります。こうしたことがあつて三月二十六日には讃岐国塩飽の地頭の館にきました。

その地頭は駿河権守高階保遠という人で、入道して西忍と号していました。この西忍はある夜のこと、満月が急に照り輝きだして、自分のたもとに入つた夢をみました。西忍はおかしな夢だ、何か起るのではないかと気にしていたところ、上人がお着きになつたので、これこそ先夜の夢は正夢であつて、月がたもとに入つたのは、上人が自分の館に寄れんことであつたと思ひ、さっそくに薬湯をつくり珍味を用意して上人をもてなしました。上人は阿弥陀さまの本願のありがたさを、念仏の功德等を詳しく西忍に話されました。

そして西忍に教え終つて、その最後に申されたお言葉が扉の御法語であります。

不輕大士とは常不輕菩薩のことです。この菩薩さまは、相手が僧であらうとなかろうと、また男であらうと女であらうと、人さえみれば、いきなりその人に対して礼拝をし、こういいました。

「我汝等を敬いて敢て輕んぜず、汝らまさに菩薩の道を行じて、みな仏とならん」
ところが相手の方では、いきなり菩薩さまに礼拝されたり賞められたりするので、驚くよりは怒つてしまい「何をいうかこのくそ僧坊め、俺が仏になるなんて馬鹿にするのもいいかげんにしろ」と、杖をふるったり瓦や石を投げつけたりして菩薩さまを追ひ払いました。

しかし菩薩さまは、いくら杖や瓦石で追いかけてられても、また他所で人に出会ふと前と同じように礼拝して「君は仏になれますよ」と繰り返されるのでした。人々はしまいにこの菩薩さまを常不輕菩薩と呼んで、少しは耳をかたむけるようになりました。四衆とは、比丘、比丘尼、ウバソク、ウバイのことで、四衆の縁を結ぶということとは、老若男女教化して、それぞれを仏教信者にしたという意味であります。

上人は、この常不輕菩薩の例をあげられ

て、西忍に対し、このように初めの内は或いは誤解され、或いは迫害されることがあるかも知れないが、自分だけが念仏の信仰に生きるばかりでなく、他人にも正しい生活させるように努力するのが菩薩行であることを教えられました。

工夫と創意をめぐらして、阿弥陀さまの本願を人々に教え、何とか念仏行者になるように導き、人々をしてお念仏を申すよう努めて下さいといい、そうすることは何も他人のためばかりでなく、自分の信仰を厚いものとするのだと、さとされました。西忍は、上人のお言葉にすっかり感激し、その後一生を通じて念仏のため努力もし、自らも励みました。

勅修御伝第三十五に「そののちは自行化他、念仏のほか他事なかりけり」と西忍のことを申しています。

上人の御法語はいつ拝してもしみじみ慈愛のこもつて温さを憶えるのですが、この御法語ほど強い切られたものは少ないと存じます。配所に赴く途中の上人として烈々たる意気と赫々たる御信念がにじみ出ているのを感じます。

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

仏教では、幽霊が本当にあると考えるのか、それが信仰に役立つものか

——おたずね——

夏は幽霊の季節といわれますが、本年もその季節になりました。つきましては、わたしの経験上、どうしてもフに落ちないことがありますので、次の点についてお回答を願いたいと思います。

一、世の中には理窟ではワリ切れない。不思議なことがあります。わたしの母親は七十二歳になりますが、カラス啼きが悪いといつて、人の亡るのを予知します。先日、裏の家の主人がガンで入院していたのですが、その朝、今日は近所でお葬式があ

るよと申ししておりましたら、その通り、その日の九時に、その方が亡くなりました。わたしが知ってからでも、もう三度、こういうことがありました。本当にこういうことが分るのでしょうか。また、分るとするならば、何故分るのでしょうか。

二、わたしの母はこのほかに、小さい時に、田舎で、幽霊をみたといっています。その話を書くとき長くなりますから、かいつ

まんで書きますと、母が七、八歳の頃、田舎の親戚へ泊りに行って、奥の座敷にひとりでねかされていたのだそうです。まだ、家の者も、一緒に行った祖母も茶の間で起きて、世間話をしていたのだそうですが、急に、奥の座敷で泣声があるので、おどろいて行ってみると、ねかされていた母が、床の上で泣いているのだそうです。な

だめて、話をきいてみると、その年の春、十七八の年頃に、身をなげて死んだおばさんに当る人が、母の枕もとにあらわれて、

ジッと母をみつめていたのです。この人は、幼い母を随分かあいがってくれて、母もよくなついていたので、母がおきあがって、その膝に甘えかかろうとしたら、フツと消えてしまったとのことでした。抱かれようと思つて、その膝に手をかけたところが、ビッショリぬれていたのにおどろいて、泣き出したとのこと。家のものは、母が夢でもみたのだらうといい合つたのですが、ふと気がつくと、庭に面した雨戸が少し開いていて、そこにビッショリと水がたまっていたのをみて、ソツとしたそうです。母が見たというのだけなら、夢でもみたのだらうといえますが、縁側がぬれていたというのですから不思議です。そんなことがあるのでしょうか。

三、最後に、こういう出来ごとと信仰とは一体どんな関係があるのでしょうか。靈魂なんかないのだというのより、あると思つた方が何となく信じやすい気がします。し、仏教で行う追善供養などは、やはり亡つた人の靈をなくさめるといっていますから、靈魂を認めているといつてもよいので

はないでしょうか。

右の三つについて、お教え願いたいと思います。(横浜市磯子区杉田・学生・相沢初子)

幽霊のあるなし等は心理的なも

ので、厳密な宗教ではありません

ん。

—お 答 え—

幽霊が本当にあるかないか。予感とか予知ということは真実か。そしてこういったものが「信仰」に役立つかどうか。この三つがあなたの御出問のままだと思います。

そこで第一に幽霊は本当にあるののかないのかと申しますと、現在の科学では「ある」という証明の出来ぬ限り、「ない」というしかないのです。心靈現象などで、幽霊を写真にとったり、暗やみで物を動かしたりすることがありますが、まだそれははっきりと証明づけられたものではありません。従って、幽霊の「ある」「なし」は全く、個人の心のもち方一つによるものとい

えます。文部省の迷信調査会でおこなった調査によりますと、「いる」と思うもの二・〇四パーセント、「いない」と思うもの「八六・八二パーセント」、「わからない」と答えたもの一〇・七〇パーセントとなっています。しかしこれはあくまでも個人個人の思い方ですから、そのいづれとも決めるわけには行きません。ただ、現在のところでは「ある」という証明がないからない。しかし、あった方が都合がよければ「ある」と思えばよいと思います。ただ、あるとかなないとかにこだわることはよくないと思います。

予感とか予知ということは、心理学的に言って「ある」といえます。ただしそれは極く限られた限度です。台風の多い年にはツバメが低いところに巣をつくるとか、地震の起る前にキズがなくなるとか、火事が出る前にはネズミがいなくなるなどといった、動物にそういうことが分る能力があるようにいわれています。これは、動物が持っている鋭敏な感覚器によるもので、人間でも修行をしたり、精神を鍛錬したりすると、こうした異常感覚を発達させること

が出来ます。忍術家が暗やみで見えたり、かすかな音をききわけたりするのもこのたぐい입니다。ですから、或る種の感覚をそなえれば、ごく近い将来におこることぐらいは予知出来ると思われれます。しかし、これもまた、それだからといって、無条件に何でも分るなどと思わぬようにして下さい。

幽霊のあるなし、予感のあるなしは純粹に心理的なことがらです。ですから、厳密に言えば「信仰」とは無関係のはずです。また、こうしたことのあるなしで左右されるような信仰は、真実の「信仰」ということは出来ません。信仰とはもっと純粹なもので、証拠とか証明とかつかい棒などには必要としない、そのもの一本で立派になり立つものです。

信仰相談欄への御出問を歓迎致します。直接、信仰に関係がなくても結構です。但し、直接御本人へのお答えは致しません。御希望によっては紙上匿名で結構です。

係より



創作

世尊と阿闍世

——最終回——

鶴田 湛 泉

深宮に幽閉され水も漏らさないほど嚴重な看視を受ける身となった韋提華夫人は、我が身を切りさいなまれるような苦惱に陥った。

何よりも案じられるのは、夫君頻婆沙羅王の身の上である。ともかく我が身には食事を差入れてはくれるが、以前にもまして看視の嚴重となった夫王には、そんなことはおそらくあるまい。自分が幽閉されてしまった以上、誰れが食物を運ぶだろうか。いたましくも餓死されるに違いない。再び大王とまみえる日があり得ようかと食物も喉に通らず不吉なたたまれぬような不安と焦慮感に迫まれるのであった。

食物を運ぶことが絶えたことによって、自分までも幽閉されたことを感づかれるに相違ない。そうなれば、どれほど驚かれ、又我が身を案じ下さるであろう。

それとも王が悪いことをしたと、目を覚ましてくれるであろうか。そんなことは、所詮とても望みなき祈りにすぎないであろう。

暗い囚屋の中で、あれを思いこれと思うと、心は千々と碎けて次ぎ次ぎと重なり起る憂苦とこの世の苦しみをまるで我が身一つに受けたような感が迫って、この先は一体どうなることであろうかとの憂悶に、身心は自然に憔悴するはかなかった。

頭を擽げた夫人は、ふと高い切窓の外へ目をやると、遙かに耆闍崛山が聳え立っている。

（あゝあそこでは、世尊がいつものように、大衆に尊い教えを説かれていたことであろう）

夫人は、以前大王と共に屢々車を駕して靈鷲山に聴法に行った時のことを回想された。

今こそ法をきいて救って貰いたい時であるのに、こんなに嚴重に看視されては、とても世尊を再び見奉ることは出来まいし、法をきくことが出来ないのは何と悲しいことか。世尊には、大衆のため説法されるという偉大な使命を持ってられる、それ故に、私一人のためにのみここへは来て貰えまい。さし迫った今の私の悲しい心を知らしめし給うて、以前阿難をお使しになって説法下されたように、

「何卒、目連と阿難をお遣し下さい。」

と胸一杯の祈りをこめて、遙かに山に向って遙拝するのであった。

夫人は、あふれ落ちる悲しみの涙で、下げた頭を暫しあげることさえ出来ないでいる。

やがて、ふと頭を上げた夫人の目に映じたのは、思いもよらぬ世尊の壮嚴なみ姿であった。

「アア」

と驚き仰ぐと、聖相は神々しく紫金色に輝き、百宝の蓮華の上に座してられるように尊く思われた。しかも、目連は左に、阿難は右に侍しているではないか。夫人は、一瞬まぼろしではないかと疑ったが、まぎれもない現実である。

その時、世尊は耆闍崛山で千二百五十人の弟子に向って法華の妙理を説いてられる最中であつたが、夫人の切ない祈願を神通力によつて察知されて、悩める一個の女性の哀願に応えんものと、一時説法を中止されると、阿闍世と提婆の謀略と妨害をおそれ、ひそかくかくれてこの深宮に出現されたのであつた。

目のあたりに世尊を見奉ったうれしさに、礼拝するのも忘れてしまった夫人は、思わず身を踊らすように立ち上つて忽ち身を地に投じたが、今迄押えていた悲しみの感情が一時にどっと送り出たものか、悶絶するばかりにワツと号泣してしまった。

ややあつて我にかえつた夫人は、幽閉されている身でありながら、なお髪装りなどして身を粧っていることに気付くと、恥しさに璣珞を手づかみにしてちぎり取り、あわてて身の威儀を正して合掌

と驚きの声を發して、しばし啞然としてこの光景を見守っていたが、さも感に堪えぬ面持で、

「王よ、そなたも幼い頃、やはりこの児と同じように指を患ったことがありますよ」

と、にこやかに声をかけた。

「え、私も！」

余りに唐突なことをきくものかと、王は母の顔を見守った。

大きくうなづいた母は、

「そうです。親子というものは全く争われないものです。そうしてられる容子は、あの時の姿とすっかりそのままでございますよ。やはり父王は、そなたを膝に抱いてあなたの指の膿を吸われて早く治そうと一心になられたのです。——父王は大王をどんなに慈しまれていたことでしょう。——それに、——それなのに、獄中に幽閉して食を絶ってしまうなど！、何という情ないことをなされるのです」

涙ぐんで後の言葉も出ないでいる。

母の一語をきいた一瞬、王は胸を劔で貫かれる思いであった。

（父王も、自分をこのように！）

果然として母を凝視して、

「それは、ほんとうでございますか」

「なんで、いつわりを申しませうぞ」

母の言葉に王の心は、大山の崩れるように根底から動揺せずにはいられなかった。

往時の幼い頃が渺茫として淡い記憶がよみがえって来て、父のやさしい姿が、目の前になつかしく浮んでくる。

我が子に対する自分の愛情を省みた王は、自分に対する愛を初めて感ずるに至ったのであった。

すると、今まで父王に対する怨嗟の炎は、にわかにはげしい思慕の念と変って行つた。今まで眠っていた父王への人間としての愛着が忽然と目ざめたのであった。

これまでの自分の非をさすると、長い間の悪夢から覚めたように狼狽して、突然群臣を叫び呼んだ。

「若しも牢舎の中に父王が生きていられることを告げた者には、この国を与えても惜しくは思わぬぞ、早く行け！」

王の改心に躍るばかりによるこんだ群臣は、我れ先きにと、先を争って、王の牢獄へ駆けて行つた。

（おろかにも、わしは提婆に迷わされてしまっていた。父王に対して誠に申しわけのないことをしてしまった。どうして謝まればいいのか）

焦慮の念にかられて父王の姿を待つ間ももどかしく、王はじっと坐していることも出来ないほどである。

一方、急にあわただしく大勢の足音が、宮殿から閑寂を破って牢に近づいてくるのを耳にした父王は、

「ああ、彼等は亦重い刑罪を加えるためにやってくるのか。いや、いよいよ自分を殺しに来たのであるまいか」

既に観念された父王は、臣下の手にかかるよりわと、無念を胸に

秘しておとろえ切った身体をよるめきながら軽うじてささえると、高い所から、我れと我が身をおどらして投じてしまったのであった。

やがて王の部屋へ予期に反して変り果てた冷い屍が家臣によって運ばれて来た。

いまさらとりかえしがつかないこの結果に、王はくづれるように父王の屍にとりすがると、身を裂く思いで男泣きにはげしく慟哭するのみであった。

八

人間の本能はいつかは父を慕ってくるものか、これまであれほど父王を怨み憎んでいた心があとかたもなく消え去ったのみか、罪なき父王を殺すに至った罪を思うて、胸を搾るような後悔の念が王の心から一刻も去らない。

良心の烈しい呵責の鞭が、日夜、王の心を打つに至った。

仁者と謳われた父王を殺した報に、やがてこの国を壊滅さすに至るかも知れないとの不安が渦巻き、心は混乱し己の犯した罪に恐怖し戦慄していた。

何を以って己の罪を償うてよいのか、底知れない罪の深さに心も顛倒し、何者かによっていつも責められているような激しい自省と悔恨にとざされ、果ては骨を焔に焼かれるような烈しい熱病に襲われ、心は錯乱して疥瘡が生じ、それが昂じて膿臭鼻をつく業病にとりつかれてしまった。

「ああ、我が悪逆の報いは未来を待たずに、既に現世に於て、こ

のような苦報を受けるに至ったのか」

我が身の破滅におののき、罪の意識が王の心を食い破り、いつも拷問台に坐っているように苦しみ悶え、呵責と悔恨の涙にくれるのであった。

王の腫物は極めて悪性だったのか、さすがの名医耆婆があらゆる手当を施しても容易に治らなかった。そののみか、日ましに悪化する一方であった。

いつも血膿が吹き出し人が変ったと思われるまで醜くなった容貌と、腐った魚のはらわたのような臭氣に、侍女も侍臣も嫌悪し、感染すると思つてか恐れて誰も近ようとしなない。

侍臣にまで嫌悪されていることを知るとしみじみと孤独感をいだかざるを得ない。

いたましい王の姿を見るにしのびす、昼夜を分たず医薬を塗布して介抱するのは、母の韓提華夫人であった。

けれどもその効は顕われず、仲々快癒しなかった。

我が身を忘れての看病につかれてか、母の美しい顔にも急に老いが感じられるのを眺めて、王はたきつせのような涙と共に謝しながら、

「母上、私の病氣は我が心から出たものでありますから、とても人の力では治らないと思います。私は自分の犯した罪によって業病にとりつかれ、生きながらに地獄の苦患を受けているのであります」

病の苦痛に堪えかね悶え訴えるあわれな王の姿に、韓提華夫人は

暗然となって涙ぐむのみである。

医薬も名医も自分の業病を救うことが出来ないと思った時、心は沈み快々として楽しまず、人も嫌悪するような醜惡な姿となったのも、父を憎んでいた己の心の醜くさの結果と心が心を裁断して、やつれてとげとげしい姿と變って行った。

大臣も代る代る病床を訪ねて慰めの言葉を述べたが、

（ああ、禽獸にも劣った頭愚な自分であった）

と自分の行為が悔いられ、発狂せんばかりの苦悶と懊惱のウズが心にまいてとどまるところがなかった。

王は一子優陀の可愛さにつけても、慈愛深かった父王の鴻恩を思わずにはいられない。

仁政を以って民を卒いて名君と謳われた父王の命を縮めたのは一体誰であったか。たえざる良心の痛みに頭は悩乱し呻吟していた。

病苦を思うにつけても、それも自ら築いた罪業の山ではないか。自らウガった罪の巨穴ではないか。何をもってしても癒しきれない大きな傷痕が、心にいつまでも大きな口を開いている。罪の意識が、現世のいかなる受刑よりも心を苦しめ、まるで生きているムクロとなり果てていた。

以前の生氣も激刺さも見られず、病苦にやつれ前非を悔いている余りにもいたたましい王の姿に、耆婆は目頭を熱くしながら、こう慰めるのであった。

「大王、あなたは前非を大變後悔なされていますが、人間に尊いのは、この懺悔の心でございます。その切ない懺悔に、どうして罪

障の許されないことがございましょう。あなたは自分の業病は、この世では治らぬと仰せられますが、さようなはずはありません。この世で治してくれる者はないといわれますが、今拘や那揭羅城の沙羅雙樹の間で最後の大法を述べられている仏陀世尊こそ、必ず御病悩を治して下さる方であります。それゆえ急いでそこへ参って世尊のお話を承ろうではありませんか」

切々と真情を吐露し、王の心を慰め鼓舞しようとした。

かすかに首を横に振った王は、陰鬱な目で、「耆婆よ、おん身はさように慰めてはくれるが、考えても見られよ。世尊のような尊い方のところへ、私のような極惡非道に汚れたものがどうして行かれようぞ」

救われることの出来ない絶望感と、罪の意識にもがき悶えて、むせび泣くのみであった。

折ふし、空中から王の名を呼ぶ異様な声がきこえた。

「早く行かれよ阿闍世王！ 如来が涅槃に入られたら、おん身は阿鼻の苦患に沈み、永久に浮ぶ瀬がないであろうぞ。早く参って世尊の教えを乞わるるがよい」

不思議な声に恐怖の眼をみはって、

「わしの名を呼ぶのは誰か」

空へききかえした。

「誰でもない、そなたの父、頻婆沙羅」

「ア」

父の愛情が慄然と骨髓に徹し、王は顔色土色となって居すくん

だ。

空から声が尚きこえて来る。

「そなたはわしはを殺したけれども、わしそなたの身を思わずにどうしていられよう。さあ一刻も早く世尊の許へ行かれよ」

親の子を想う非愍の一念は、死しても消滅しないと見える。王を励まし喚びかける声である。

「ア、ち、ちち上！」

怨んでいるとの思いの外、今尚自分を想うている父の悲心を感じて強い衝動を受けた王は、雷火にうたれたかのように恐怖に魂も消え、其の場にどっと打ち倒れて悶絶してしまった。

×

×

×

耆婆にうながされて、再生の希望を胸にした王が、世尊を訪れるため王宮を出たのは、真夏の十五夜の月明らかな夜であった。

澄んだまるい月が空にかかり、星が美しく輝いていた。

露の道の夜は次第に更け、四囲は寂然と静まりかえっている。余りの静けさに心うたれた王は、象の背にゆられながら、つきつめた心らか、ふとこんな不安にかられるのであった。

（世尊の許を訪ねるといっているが、或は謀し合せて自分を敵手へ渡すのではないか。自分を裁く恐ろしい刑罪が待っているのではないか、大きな屈辱を受けるのではないか。或は計られたのではあるまいか）

と危懼されて、幾度もくりかえして耆婆にきき確めた程であった。

空の美しい星さえ、王には罪を責めているように感じられたのである。

やがて奄婆園の林中にたどりついた王は象の背を下りると、おそるおそる世尊のみ許に近づいて、まぶしげに世尊を仰いで、その前にうやうやしくぬかづいた。

「世尊よ、私の懺悔をおきき下さい。私は愚にも心狂って、仏法の信心篤い父王を殺するという大逆を敢てしてしまいました。願くば愍哀をたれ給うて私を助け給え」

今は世尊にすがりつくより外なかった王は、衷心から救を乞うたのであった。

世尊は、王にねんごろに教誨をたれられたのはいうまでもない。

世尊の教えをきいているうちに、提婆のために半生を顛弄され悪逆に汚濁された心の濁れが清められ、心中の解き難い悩みも全てぬぐわれた王は、ここに心機一転して急に太陽の光にうたれたように豁然たる思いにしばし陶醉していた。

懺悔の瞬間は新生回心の瞬間であり、第二の自己の誕生でもある。懺悔の涙の一滴は、罪障の水河をも解く。

晴れ晴れとした喜悦に心が充ち満ち、罪禍に汚された血が清められると、あれほど頑固であった全身の疹瘡も、奇蹟的に不思議にも完全に治癒してしまつたのであった。

罪禍を多く担っただけ、それだけ深く信仰を求めることとなった王は、世尊に篤く帰依するに至つたのはいうまでもないが、世尊の滅後も諸弟子を援護し、後年經典の編輯が初めて行われた時に、王

暗然となって涙ぐむのみである。

医薬も名医も自分の業病を救うことが出来ないと思った時、心は沈み快々として樂しまず、人も嫌惡するような醜惡な姿となつたのも、父を憎んでいた己の心の醜くさの結果と心が心を裁断して、やつれてとげとげしい姿と變つて行つた。

大臣も代る代る病床を訪ねて慰めの言葉を述べたが、

(ああ、禽獸にも劣つた頑愚な自分であつた)

と自分の行為が悔いられ、發狂せんばかりの苦悶と懊惱のウズが心にまいてとどまるところがなかつた。

王は一子優陀の可愛さにつけても、慈愛深かつた父王の鴻恩を思わずにはいられない。

仁政を以つて民を卒いて名君と謳われた父王の命を縮めたのは一体誰であつたか。たえざる良心の痛みに頭は悩亂し呻吟していた。

病苦を思うにつけても、それも自ら築いた罪業の山ではないか。自らウガつた罪の巨穴ではないか。何をもつてしても癒しきれない大きな傷痕が、心にいつまでも大きな口を開いている。罪の意識が、現世のいかなる受刑よりも心を苦しめ、まるで生きているムクロとなり果てていた。

以前の生氣も潑刺さも見られず、病苦にやつれ前非を悔いている余りにもいたたましい王の姿に、耆婆は目頭を熱くしながら、こう慰めるのであつた。

「大王、あなたは前非を大變後悔なされていますが、人間に尊いのは、この懺悔の心でございます。その切ない懺悔に、どうして罪

障の許されないことがございましょう。あなたは自分の業病は、この世では治らぬと仰せられますが、さようなはずはありません。この世で治してくれる者はないといわれますが、今拘や那揭羅城の沙羅雙樹の間で最後の大法を述べられている仏陀世尊こそ、必ず御病悩を治して下さる方であります。それゆえ急いでそこへ参つて世尊のお話を承ろうではありませんか」

切々と真情を吐露し、王の心を慰め鼓舞しようとした。

かすかに首を横に振つた王は、陰鬱な目で、「耆婆よ、おん身はさように慰めてはくれるが、考えても見られよ。世尊のような尊い方のところへ、私のような極惡非道に汚れたものがどうして行かれようぞ」

救われることの出来ない絶望感と、罪の意識にもがき悶えて、むせび泣くのみであつた。

折ふし、空中から王の名を呼ぶ異様な声がきこえた。

「早く行かれよ阿闍世王！ 如来が涅槃に入られたら、おん身は阿鼻の苦患に沈み、永久に浮ぶ瀬がないであろうぞ。早く参つて世尊の教えを乞はるるがよい」

不思議な声に恐怖の眼をみはって、

「わしの名を呼ぶのは誰か」

空へききかえした。

「誰でもない、そなたの父、頻婆沙羅」

「ア」

父の愛情が慄然と骨髓に徹し、王は顔色土色となって居すくん

だ。

空から声が尚きこえて来る。

「そなたはわしはを殺したけれども、わしそなたの身を思わずにどうしていられよう。さあ一刻も早く世尊の許へ行かれよ」

親の子を想う非愍の一念は、死しても消滅しないと見える。王を励まし喚びかける声である。

「ア、ち、ちち上！」

怨んでいるとの思いの外、今尚自分を想っている父の悲心を感じて強い衝動を受けた王は、雷火にうたれたかのように恐怖に魂も消え、其の場にどっと打ち倒れて悶絶してしまった。

×

×

×

耆婆にうながされて、再生の希望を胸にした王が、世尊を訪れるため王宮を出たのは、真夏の十五夜の月明らかな夜であった。

澄んだまるい月が空にかかり、星が美しく輝いていた。

露の道の夜は次第に更け、四囲は寂然と静まりかえっている。余りの静けさに心うたれた王は、象の背にゆられながら、つきつめた心らか、ふとこんな不安にかられるのであった。

（世尊の許を訪ねるといっているが、或は謀し合せて自分を敵手へ渡すのではないか。自分を裁く恐ろしい刑罪が待っているのではないか、大きな屈辱を受けるのではないか。或は計られたのではあるまいか）

と危懼されて、幾度もくりかえして耆婆にきき確めた程であった。

空の美しい星さえ、王には罪を責めているように感じられたのである。

やがて奄婆園の林中にたどりついた王は象の背を下りると、おそるおそる世尊のみ許に近づいて、まぶしげに世尊を仰いで、その前にうやうやしくぬかづいた。

「世尊よ、私の懺悔をおきき下さい。私は愚にも心狂って、仏法の信心篤い父王を殺するという大逆を敢てしてしまいました。願くば愍哀をたれ給うて私を助け給え」

今は世尊にすがりつくより外なかった王は、衷心から救を乞うたのであった。

世尊は、王にねんごろに教誨をたれられたのはいうまでもない。

世尊の教えをきいているうちに、提婆のために半生を翻弄され悪逆に汚濁された心の濁れが清められ、心中の解き難い悩みも全てぬぐわれた王は、ここに心機一転して急に太陽の光にうたれたように豁然たる思いにしばし陶醉していた。

懺悔の瞬間は新生回心の瞬間であり、第二の自己の誕生でもある。懺悔の涙の一滴は、罪障の氷河をも解く。

晴れ晴れとした喜悦に心が充ち満ち、罪禍に汚された血が清められると、あれほど頑固であった全身の疹瘡も、奇蹟的に不思議にも完全に治癒してしまつたのであった。

罪禍を多く担っただけ、それだけ深く信仰を求めることとなった王は、世尊に篤く帰依するに至ったのはいうまでもないが、世尊の滅後も諸弟子を援護し、後年經典の編輯が初めて行われた時に、王

舎城外に巨費を投じて大伽藍を建立してその便に供し、感激と共に
仏法の宣布に協力を惜しまなかった。

一度び阿闍世王が帰仏した後は、悪魔の化身のような提婆も、あ
われなものであった。

彼が率いていた新教団の五百人の徒衆も、既に前非を悟って彼の
許を去って世尊の教団へ帰っていた。

今は提婆の姿も、落莫として孤影悄然たるものであった。彼が城
内に入って托鉢に歩いても、これまでの数々の悪行をにくみ、彼を
蛇蝎の如く忌み嫌って、誰一人として食物を施そうとする者とは
ない。のみならず、彼の持っている鉄鉢まで奪い取って打ち砕いて
しまう者もいる程であった。

ここに至っては、いかに傲岸な氣象を備えた彼も、胸中悶々とし
て焦慮せざるを得ない。

「提婆が訪れてございまする」

或る日、提婆が城内に訪れて来たことを、侍臣が王に告げた。

「何！ 提婆が来たとな、わしをたばかり居ったる憎くき奴め、
追い返して、一步たりとも入れるな」

王は怒気を含んで命じた。

提婆はくりかえし門に入ることを乞うたが守門の衛士は固く拒ん
で許さない。王の厳命に、不屈な彼も、いかんとすることは出来な
い。

彼も予め覚悟はしていたろうが、現実には拒まれると、心甚だおだ
やかであり得なかった。

「おのれ、
阿闍世、よく
も豹変しおっ
たな」

提婆は、怒
濤のように逆
巻く瞋りを満
面に現わして
衛士をにらみ
つけて、無念
そうに突っ立
っているのみ
だった。

(完)

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年七月廿五日 印刷

昭和三十五年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人顕仰会

振替東京八二二八七番

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 竹中 信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円一八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円一八円

側々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰の遺文にみる 佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすりめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

大正大学教授 竹中 信常 著

宗教儀礼の研究

青山書院刊
A 本文三八〇頁
定価九百円

宗教は実際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところは、信仰と儀礼の一致相即である。

本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめる。

内容

特価 800円
送料当方負担

- 第一編 儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼
- 第二編 儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼
- 結論 礼儀と信仰

ヤスパース著

仏陀と龍樹

大正大学講師 峰島 旭雄 訳

理想社刊
B 本文二五〇頁
定価三三〇円

現代西洋の卓越せる哲学者ヤスパースが十年の歳月を費して公けにした論著。西洋哲学の立場から仏教を新しく評価解釈し、これをきわめて平易な言葉で敘述している。

東京都品川区上大崎一の七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十五年七月二十五日印刷 昭和三十五年八月一日発行

浄土

第二十六卷

第八号

定価金五拾円(送料)

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田

株式会社